
LOVED

やかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVED

【Zコード】

Z6254Y

【作者名】

やかん

【あらすじ】

高校2年生の初夏。？林明奈は父の再婚によつて母親と弟ができる。新しい家族には簡単に馴染めなくてイライラする日々を送つていた。なんてことはないきっかけで新しい母親と弟を受け入れようと決める。しかし、変わろうとした時には抱えた病気の進行が早まつてしまい……。

現状

再婚するから。

父は朝そう言つて会社へと出勤していった。母が死んでから16年、男手ひとつで育ててくれた父さんに文句をいうつもりはない。

「てか、父さんいつの間に・・・」

まあ、どうでもいいか。仕度を終え学校へ向かう。

父さんが再婚したら、学校を転校しなければいけないのか?「ふと、そんな事が頭をよぎる。

「別にいいか、」

転校しても。大切な友人はいるけれど、2度と会えない訳ではないだろう。いつもは長い学校への道のりを大変だとは思わなかつた。気がつくと学校の前。無意識つて怖い。

「おっす、?林」

ポン、と肩を叩かれる。振り返るとそこにいたのは

「おはよ、悠斗」

金髪碧眼という目立つ風貌をしたクラスメートの、駒野悠斗。（こまの ゆうと）中1の時からの友人。

「聞いたか? 今日、数学小テストあるんだとー」

くそくそ。ブツブツ呟く悠斗。ああ、勉強してないんだな。ドン

マイ悠斗。

「余裕だよー。わたしは、だけど」

「あー、もうつ！？林ムカつく！！」

「あら悠斗。数学教えてほしくないの？」

表情筋が明らかに緩んでいるな、わたし。しかし、仕方のないことだ。悠斗をからかうのは楽しいのだから。

「・・・・教えて欲しいです（ニヤニヤいやがつて。チクショ

ー・・・・！）」

上目づかいで恨めしそうにわたしを見る悠斗。睨んでいるつもり

かもしだいが可愛いだけ。

「はい、このノート見れば8割は点取れるよ。色ペン使つてないと

ころもちやんと覚えてね」

「うーーーさんきゅ」

喋りながら教室に向かうとすぐに着いてしまつた。わたしの席は窓際の一番後ろ。悠斗は廊下側の一番後ろである。

「おはよー?林」「おはよーひー?林」「はよー」

「おはよー」

クラスメートに挨拶を返す。悠斗以外とは深く関わらないとしないわたしを受け入れてくれるこのクラスが好き。

さて、4限目。数学の小テストである。

始まる直前、ちらりと悠斗の方を見る。割と落ち着いているようだ。あ、じつち向いた。顔は出さず、口の動きで言葉を伝える。

「(が、ん、ば、れ)」

悠斗は音のないその言葉を受け取ると、笑つて頷いた。

現状（後書き）

ジャンルとして恋愛をつけていますが、ちゃんと恋愛モノを書ける
か不安です。
精一杯頑張ります。

迎え

数学の小テストも無事に終わり、放課後。

「また明日な」

「うん。部活頑張つて」

悠斗はサッカー部に所属している。レギュラーではあるが、いつ落とされるか分からぬらしい。実力主義の部活だから仕方ない。

「さて、帰るか」

桜ヶ丘学園は部活に必ずしも所属しなければならないわけではない。家庭の事情等、正式な理由さえあれば帰宅部も許される。

学校の門から外へ出ると、見慣れない制服の男が立っていた。銀色の髪が目を引く。一瞬視線を向けたものの、すぐに興味が失せる。早く帰ろう。少し歩くスピードを上げる。

「あんた、？林明奈か？」

なんか、名前呼ばれた気がする。振り返れば、銀髪の男がすぐ後ろにいる。え、怖。足音しなかつたぞ。

「誰？」

一応確認だ。知り合いかもしれない。わたしはどうでもいいと思つたことはすぐに忘れてしまうから。

「先に質問に答える」

なんだコイツ。

「？林明奈ですけど。で、貴方は誰？」

「榎侑斗。柚樹さんに頼まれて迎えに来たんだけど、連絡貰つてないのか？」

悠斗と同じ名前。柚樹つて・・・父さんの名前だ。連絡？鞄から携帯を取り出し確認する。

『再婚相手の息子さんが学校まで迎えに来てくれるから。会流してね P・S 息子さんの名前は榎侑斗君だよ』

「そういう事は朝に言えよ・・・」

クソ親父！

「納得してくれたか？」

「ええ、まあ」

うん。なんか、そんな感じで一緒に高そうなレストランに行くよ。
もう訳が分からぬ。

迎え（後書き）

全体的に一話一話が短いです。

キヨウダイ

「明奈、いひら榎遥香さん。父さんの再婚相手だよ」

「榎遥香です。よろしくね、明奈ちゃん」

声が上手く出ない。かすれた声で返事したくない。

とりあえず頷く。

その後もいろいろ話していたけど、頭に入つてこなかつた。どうしてだろうか。再婚がイヤ?まさかね。

「苗字は榎にしようと思う。明奈、いいかな?」

自分の名前に反応する。苗字とか、どうでもいいじゃん。何でわたしに聞くの?

「父さんがそうしたいなら、それでいい

「・・・そうか」

父さんはたぶん気づいた。わたしが機嫌悪いこと。

「キヨウダイになるわけだし、明奈ちゃんと侑斗2人で話してみた

う?

遥香さんが提案する。キヨウダイね・・・。

、侑斗君、のほうを見れば彼は下を見ていて。

彼の無表情に驚いた。肌の白さがその表情を引き立てている。溜息をついて、わたしのほうを見ると少し面倒くさそうに

「外に出るか?」

と言つた。

うん。なんか、そんな感じで一緒に外に出たよ。
なんか、もうヤダ。

「誕生日」

誕生日?

「俺が兄か、あんたが姉か」

「誕生日聞くつて事は・・・同じ年つてこと?」

「頭は悪くないみたいだ。そういうことだよ。
はい、上から田線一。なんだコイツ。

「12月3日」

「・・・1日違いで俺が弟だ」「
わあ、お姉ちゃんだつてー。
まじか。

キョウダイ（後書き）

侑斗君のキャラが定まつません。どうしたものか・・・

「来週から榎明奈になる」「はあ？おおおお前、けけけ結婚でもすすすすんのか？」いろいろ省いて悠斗に説明したら、案の定誤解した。本当に見ていて飽きない。

「馬鹿ね、そんなわけないでしょ。父さんが再婚するの。なんで苗字を変えるかは知らないわ」「なんだよ。そういうことか」「うん、そういうこと」「あー良かつたあー」「なんで悠斗が安心するの？」

「……………友達だからナ！」

今の中は何だったのだろう。まあ、こういう二つ間はたまにある。気にしないのが一番だ。

「そりゃ、どーも」

ふと時計を見れば、昼休みが終わる10分前になつていていた。

「悠斗、わたし今日早退するから」

「おー、了解。あーちゃんには俺が伝えておくから」

あーちゃんというのはわたしたちのクラスの担任のあだ名である。本名は天富蒼樹。26歳とまだ若い教師であるが授業は面白く、多くの生徒から慕われている。わたしも教師の中では彼が一番好きだ。

「お願い。早退することは伝えてあるから、帰つたつてことだけ伝えておいて。じゃあ、また来週に」

「おう！またなー」

月に一度は必ず早退をするわたしは、その理由を悠斗に言つたことがない。聞かないでいてくれる悠斗の優しさに甘えてるのだ。

鞄を持ち、教室を出る。靴箱まで行けば、父さんが待つていた。

「「めん、駒野と話しこんでた」

「大丈夫だよ。僕も着いたばかりだから。さ、車に乗つて
「うん」

学校を早退し、親に送つてもらう場所はわたしの大嫌いな病院。
自分の命の短さを認めざるを得ない場所にわたしは行くのだ。

「また少し体温が下がっていますね」

主治医である柳川先生の一言に溜息をつきそになる。

34・8度。人の体温としては低い。あたしの病は徐々に体温が低くなっていくというものである。原因は不明。母さんはこの病によつて、20歳で亡くなつた。長く生きたほうだと、父さんは言つていた。遺伝的なもので、母は祖母から、わたしは母からこの病を受け継いでしまつた。母さんを恨んだことがないとは言えないけれど、わたしは産んでくれたことに感謝している。弱つた体に宿つた命を捨てたりしなかつた母さんを恨んでは罰があるだろう。

「柳川先生、わたしはあとどれ位学校にいられますか？」

「このままの速度で進行が進めば、進級できるか分からぬ」

体温が34度を下回つた時点で、入院することを約束させられている。残り0・8度の猶予はあまりにも短い。高校2年生になつてから、体温が低下する速度が格段に上がつた。わたしの命の火は急速に小さくなりはじめたのだ。

隣に座る父さんがそつとあたしの頭を撫でた。何も言わないのは、何を言つていいのか分からぬからか。それとも、母さんを思いだしているのか。

「明奈ちゃん、今日は精密検査を受けていってくれるかい？」

「分かりました」

問診が終わり、とりあえず待合室に戻る。

「父さん、家にいったん戻つていて。終わつたら、連絡するから」精密検査を受けるとなると、長くかかるだろう。待たせるのは、わたしが嫌だ。

「うん。ご飯作つて待つてるから」

「あははっ、久しぶりの父さんのご飯楽しみだなあ」

「どびきりおいしいもの作るからね」

「うん」

バイバイ、手を振つて父さんは家へと帰つていった。

これで気が楽になる。田をつぶつて名前を呼ばれるのを待つた。

「明奈さんか？」

名前を呼ばれるには早くないか？不思議に思つて田を開ければ、来週からわたしの弟になる榎侑斗がいた。どうして病院なんかにいるのだろう。

「こんにちは、侑斗君。どうして病院に？」

「それはこっちのセリフだ」

一緒に食事をした後、病気の事を黙つていて欲しいと父さんに頼んだ。もしかしたら、遙香さんは知つてているかも知れない。けど、少なくとも彼はわたしの病気を知らないはず。

「友達のお見舞い、かな。侑斗君は？」

知られたくないと思つた。だから、嘘をついた。

「・・・知り合いの見舞い」

嘘つきなわたしから分かる。彼は今、嘘をついた。わたしと同じ種類の嘘。

「明奈ちゃん、いいかな？」

わたしの思考を遮るように聞こえたのは、柳川先生の声。

「はい、今行きます。じゃあ侑斗君、またね」

「ああ」

詳しくは言わなかつたし、詳しく聞かなかつた。そして、わたしたちは嘘をつきました。

どうして嘘をついたのかなんて、聞けない。聞かれて困るのはわたくしなのだから。

通院（後書き）

文章中にある病は架空のものです。実際に存在するものとは一切関係ありません。

引越し（前書き）

文章中にある病は架空のものです。実際に存在するものとは一切関係ありません。

土曜日。今日、元の家から少し離れたところに引っ越した。新しい家族との生活が始まる。

「無事に引越しが終わってよかつたよ」

「そうね。そうだ、お茶にしましょ。侑斗手伝つて」

遥香さんが湯を沸かし、侑斗君がカップの用意をする。遥香さんを「母さん」と呼ぶ勇気はまだない。

わたしと父さんは座つて待つている。

「明奈、学校に少し近くなつてよかつたね」

「んー、うん。これから暑くなつてくからね、助かるかな」

温度差はわたしの体には毒だから、日傘を差して、できるだけ日に当たらないように登校しなければいけない。距離が短くなるのはいいことだ。車で送つてくれる父さんは言つけれどそんな事をしたら、自分が惨めになるからと断つた。弱いことを認めるのはイヤ。わたしはいい意味で言つたつもりだつたけど、父さんは一瞬眉をひそめた。

「ねえ。わたしが、新しい日傘欲しいんだ。今度一緒に買いに行こうよ」

笑つていてほしいから。悲しそうな顔を見たくないから。わたしは物に頼つて誤魔化すの。

「うん、一緒に行こう。他に欲しい物はない?」

「ないよ。とりあえず、新しい日傘が欲しいの」

分かつたよ、と言つて父さんが笑つた。

「お茶入れたわ。クッキーも出したの」

4つのカップがそれぞれの前に置かれた。2倍に増えたそれらに違和感を覚えた。早く慣れないといけないと思う自分と別に慣れないもいいじゃないかと思う自分がいる。

「良い香りだね。クッキーも美味しそうだ」

父さんが遙香さんに向かって笑う。ああ、変な感じがする。今までその笑顔はわたしと母さんのものだったから。・・・ただの独占欲だ。

ゆつたりと時間が過ぎていく。話し声は絶えないことがない。まあ、主に喋っているのは父さんと遙香さんだけだ。

「明奈ちゃんもクッキー食べてね」

「あ、はい」

愛想笑い。いい加減疲れる。クッキーにはナツツが入っている。わたしはナツツが苦手なのだ。食べないんじやなくて、食べたくない。父さんはわたしの好き嫌いを知らない。知られないように、細心の注意をはらってきたから。好き嫌いなんていうわがままに父さんを困らしたくはない。

残っていた紅茶を一気に飲み干した。

「疲れたので部屋に戻ります。お茶、美味しかったです」

キッチンにカップを置き、自分に引えられた2階の部屋へと向かった。

父さんや遙香さんがどんな表情をしているか知らないふりをして。侑斗君の視線に気がつかないふりをして。

「息が詰まる」

部屋に入るなり、呟いた言葉は無意識に出たものだった。

この新しい生活にわたしは慣れることができるだらうか。先行きが不安でならない。

観察日記ー（前書き）

サブタイトルに『観察日記』が付く場合、視点が偽りになります。文章中にある病や病状は架空のものです。実際に存在するものとは一切関係ありません。

姉が荷物を片付けていく様子を横目で見ていた。一週間前、病院で嘘をついたことに何故か罪悪感を感じ、話しかけられないでいた。大きな荷物を持って歩く姉は、とても危なっかしい。

「明奈さん」

「なに?」

名前を呼べば、警戒した声で返事が返ってくる。4人でいる時間が増えるようになつてから、姉は俺と母さんに対する壁を厚くした。「重そうだから、手伝う」

荷物を持つてみると、思つていた以上の重量だった。

「大丈夫よ。自分で運べるわ」

「作業効率を考えれば、俺が運んだほうが速い」

「侑斗君だつて、まだ片付け残つてているでしょ」

「もう終わつた」

「・・・分かつたわ。その荷物だけお願ひ」

部屋の前に置いといて、そう言つと姉は次の荷物を取りに行つてしまつた。

俺との会話を続けるつもりはないらしい。

片付けがすべて終わり、お茶をすることになつた。俺と母さんが準備をしている間、柚樹さんと日傘の話をしていた。柚樹さんと話している間はとても楽しそうだ。

母さんと柚樹さんが話している間、ずっと黙つていた。何かに耐えるように。

カップをギュッと握つた後、不自然なくらいに自然に笑つて感情の読めない声で言つた。

「疲れたので部屋に戻ります。お茶、美味しかつたです」
そして返事を待たず、部屋へと戻つていつた。

「ごめんね、遥香さん。2人での生活が長かつたから、なれないみ

たいだ

姉が姿を消した廊下を見つめながら、柚樹さんが笑った。苦笑と言つたほうが正しいだらうか。

「大丈夫。初めましてって言い合つてから、まだそんなに経つてないんだから仕方ないよ。少しづつなれていけばいいわ」

ね、そうでしょ。カップの中を見つめながら母さんも笑つた。

「柚樹さん、先週明奈さんと病院で会つたんですがどこか悪いんですか？」

本人に聞いてもきっと答えてくれないから、ずるいとは思うが聞いてしまつた。柚樹さんは困つたように溜息をついて、ゆっくりと話しだした。そのとき横目で見た母さんの表情は少し苦しそうだつた。病院へ向かう俺を見るときと似た表情。

「少しずつ、体温が低くなつていく原因不明の病なんだ。人間の体温は低くとも35度台だよね。でも明奈はそれを下回り始めている」

「・・・治療法はないんですか？」

「残念ながらね。体温調節を上手にできないから、運動は控えさせてる。いろいろと予防策を考えて実行はしているけど、いまいち効果が認められないんだ」

「明奈さんだけがその病気？」

「いいや、違うよ。この病気でわかつてゐることは遺伝的なものだつてこと。明奈の母親と祖母がこの病気で亡くなつてゐる。2人の症状から、明奈はある一定の体温以下になつたら、入院することを約束させているんだ」

「あとどれ位の間、自由に動き回れるんですか？」

「進級できるか分からんらしいけど、正確な時期を僕は知らないんだ。・・・ああ、どうしてつて顔をしているね。明奈の主治医にね、聞いたことがあつたんだけど、答えてくれなかつたんだ。明奈が絶対に言つくなつて。言つたら、絶対にダメつて言われたからつて。患者の意志を1番に尊重する方だから、僕はもう聞かないことにしたんだ」

「信用なさつているんですね」

「どうかな。僕は明奈が信用しているから信用しているだけだよ。

頼りない父親だけど明奈の思いは尊重してやれるからね」

すべてを教えてくれたわけではなさそうだが、自分のことを話して

いな俺にはこれ以上追求はできない。

「そうですか・・・。あの、教えてくださいありがとうございました

」

さういふいたしまして、柚樹さんはそう言つて笑つた。

柚樹さんは何も言わないうが・・・たぶん俺の病気のことを知つて
いる。

もう治つたはずなのに、俺を苦しめ続ける病気のことを。

ますます侑斗君のキャラが定まりなくなっていく……。
頑張ります。

引越しを終えた翌々日。

た。いつたい何があつたのだろうか。

「？林聞いたか？」

悠斗近いか? ハッケ 2歩ハッケで 何?」

「転校生がどうしたの?」

「となりのクラスに来たんだよ。私立西東学園から

「お坊ちや お学校からわざわざ? そんな黒鹿なことあんわけな
ーじやばー

西東学園は「」から一駅向「」にある、金持ちのボンボンが通う

有名な男子校だ。世間のことに疎いわたしでも知っている。

「で、その馬鹿の名前は？」

「神侑斗。俺とおんなじ名前だったから覚えちました」

なんで。どうして。誰か説明して。わたしにわかるように今すぐ

おかしくはない、のか。

「だったら一言くらい言えはいいのに。いや……そういえは、話しかけられるたびに嫌そうな顔したからな……」

一緒に生活していくイラッとする態度をしてる割に性格自体は悪くないことが分かった。だからといってどうもしないけど。

いや・・・待てよ。同姓同名の別人っていう可能性もあるかな。
(認めてしまえばいいのに認められない。嫌な意地)

「もしかしてさ、その転校生って銀髪だった?」

「え? ああ、うん。そうだけど、何で知つて「明奈さん」うわっ・
・!」

突然聞こえてきた声に悠斗が飛び上がつた。わたしのほうへ近づいてきたからよけて背中を押すと、「痛つ」という声と「ンン」という鈍い音が聞こえた。「愁傷様。

「・・・侑斗君」

もう見てしまつたから否定できない。隣のクラスに転校してきたのはわたしの弟になつた榎侑斗だ。

「柚樹さんが今日の放課後開けておいて欲しいって言つてた」
侑斗君は大きな音をたてて倒れた悠斗に目もくれずわたしの姿を見つけると声を発した。

ああ、みんなの視線が刺さつている気がする。とりあえず、返事をしておおくか・・・。

「・・・了解。あー、ありがとう。伝えてくれて」

「別に柚樹さんに頼まれたから伝えただけだ」

そつけない返事をすると軽く頭を下げて弟はこの場を離れた。
さつさと戻るくらいなら休み時間とかに来てくれればよかつたのに。クラスメートの視線と廊下からの視線で溶けてしまいそうだ。
人とそんなに関わらないから注目されるの慣れてない。

「転校生と知り合いなのか?」

「名前で呼ばれてたよね。なんで?」

「? 林テメエ、よくも押しやがつたな・・・デコ打つたじやねえ

か

「・・・ハハハハハ。

「あはっ・・・」

笑うしかないね。どうしようかこの状況。質問攻めだ。

まつたく、面倒な1日になりそうだ。

家に帰りたい・・・いや、どこか遠くへ行きたいな。家に帰つても仕方ないし。

5時間目 体育

どういう訳か今日の体育は男女合同で、しかも2クラス合同。気分が最悪なのは弟のいるクラスと合同なせいだろう。

「？林、記録とつてくれるかー？」

種目は3kmの長距離走。もちろんわたしは見学。病気のことは体育教師の原先生も理解しているので、記録などをわたしにやらせる。「何もしないで居るよりは気が楽だろ?」といつづらしげに確かにそうなので助かる。

「はい。・・・あの、同じクラスの人の名前は分かるんですけど「記録言つ時に名前も言つてやるから大丈夫だ」・・・分かりました。お願ひします」

原先生の特徴は人の言葉を遮つて喋るところだ。

バインダーに挟まれた名簿を受け取り2クラス分に簡単に目を通した。2枚目の名簿の一一番下に手書きで「榎侑斗」と書かれていることに気が付く。

西東学園から桜ヶ丘学園に来るなんて馬鹿なのだろうか。施設だつて、勉強の内容だつて西東学園のほうが良いはずなのに。

「意味分かんない」

「あ、？？林、今何か言つたかー？」

「あ」に濁点つけるとか怖いからね・・・。

「・・・何も言つてません」

「そうかー？あー、じゃあ記録頼むぞ」

「分かり「お前ら準備運動終わつたなら早く並べー」・・・チツ」人の言葉を遮つてるのはわざとなのか?わざとでもわざとじやななくても止めてほしい。

「・・・・・？」

ふと、視線を感じ後ろを見渡すが誰もこいつらを見ていなかつた。
氣のせい・・・かな。

パンツ。

原先生の合図で長距離のタイム計測が始まつた。

少なくとも10分は暇だ。田陰に座り込む。

「榊」、見学するなら？林の手伝いしてやれ。ついでにクラスメー

トの名前覚える
「分かりました」
「榊」という名前にわたしは無意識に原先生の視線を追つた。視
線の先には、弟がいた。

つまり、弟は体育を見学していて、わたしと一緒に記録をとる。
まじか。

5時間目 体育（後書き）

誤字を発見した為修正しました。

観察用紙2（前書き）

今回お詫びめです。

「今日の放課後開けておいて欲しいって、明奈に伝えてくれる?」
「……は?」

朝、明奈さんが登校した後に携帯で連絡すればいいのに柚樹さんは俺に伝言を頼んだ。

「じゃあ、よろしく。ちゃんと伝えてね」

それだけを言って笑顔で出社していった。

「優しい顔して実はうだる。ふざけんな」

なんて言えるわけもなく俺は誰に言つでもなく「分かりました」と呟いた。

予想は俺を裏切らない。姉は思つていたよりは嫌そうな顔をしなかつたが、「どうしてここにいるんだ」という心の声が伝わってきた。

俺の声に驚いて飛び退いた生徒を助けず、無表情に追い討ちをかけた姉の姿には少し焦った。

姉にも、俺の声に驚いた生徒にも、いろいろと申し訳なくして俺は用件だけを伝えて、すぐに教室へと戻った。

転校初日。1時間目は生物、3時間目は理数数学、4時間目は地理、5時間目は体育。6時間目は国語。2時間目は何だったか。

一番記憶に残つたのは5時間目の体育だ。姉のいるクラスと合同でしかも男女合同。姉の嫌そうな顔が容易に思い出せる。あと、少しだけ開いてくれた心もすぐに思い出せる。

諸事情により体育は見学することになつていて、俺は他の人達が走つていく姿を見てなんとも言えない気持ちでいた。

「神一、見学するなら？ 林の手伝にしてやれ。ついでにクラスメートの名前覚える」

更にその気持ちを下げさせる言葉に溜息をつきそうになつた。我慢だ……。

「分かりました」

呆然とした表情の姉の元へ行き、「よろしくお願ひします」と言つて隣へ座つた。

沈黙が続く。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

沈黙を破つたのは姉だった。

「何か？」

「どうして体育を見学するの？」

「柚樹さんから聞いてないのか？」

柚樹さんが話していないことを知つていて、聞いてみた。

「父さんに？…………聞いてないわ」

首を小さく傾げた。少し眉を寄せて考へるような表情をする。

「俺、小さい頃心臓の病気だつたんだ。手術して良くなつた。けど、

「…………」

姉は俺の方を見て、話をちゃんと聞いてくれていた。少し、意外だ。

「運動は禁止されてる。治つたはずなのに、おかしいだろ？」

体育を見学する理由だけを言つつもりが自虐的な言葉を言つてしまつた。どうしてだらう。

「……言いづらいことだつたでしょ。教えてくれてありがと」
「どうでもいいと言われると思ってた。何も言わなくとも、顔にどうでもいいという感情が浮かぶと思っていた。だが、姉は話を聞いている間も聞き終わつた後も真剣だつた。

「いや、別に……どうして、『そろそろ先頭が戻つてくるぞ』……」

「……」

「はい」

どうして見学しているんだ。その問は原先生によつて遮られた。柚樹さんからは教えてもらつたが、本人に教えてもらいたいと思つた。でも、今は話をしている暇はないらしい。

姉はゆっくりと立ち上がると原先生の隣に立ち記録を取る準備を始めた。

俺も自分の役割を果たさなければ。まずは、クラスメートの顔と名前を覚えようか。

「一番手は駒野だ。9分58」

見覚えのある金髪。ああ、今朝姉に背中を押されていた人だ。
運動神経よかつたのか……。

「お疲れ様、悠斗」

「おう……うー、疲れたあー」

駒野はそのままバタリと倒れ込んだ。

「田中ー。5分5」

「田中つてどつちの田中ですか?」

「弟のほうだ」

田中と呼ばれた男子生徒は双子らしい。

後ろから同じ顔が向かつてきつて。先にゴールしたほうの田中も後ろの田中も無表情だ。

「怖い……なんだこの威圧感……」

本音が出てしまつた。姉はそれが聞こえていたようで、俺の方を見て笑つた。たぶん無意識。

「ふふつ。なにそれ

「同じ顔が後ろからつてシユールだと思つ」

「だよねえ……うあ

普通に話していることに気がついた姉は気まずそうに視線を前へ戻した。

「次も田中。5分20」

「はい……えと、田中君は弟のほうが侑斗君と同じクラスよ

「なるほど。区別できるように努力します」

「制服着てる時は違う」コーディネートだから分かりやすいと思つわ

「へえ。あとで見てみるか」

放課後。家に帰ろうと廊下へ出ると、姉が俺を待っていた。

「……一緒に帰らない?」

「…………」

なんて返したらいいか分からず俺は2回頷いた。

2人で歩いている間沈黙が続いたが、今回も姉がそれを破つた。

「……今のところわたしは遥香さんと侑斗君を受け入れるつもりはないわ。だって、父さんと2人で今まで過ごしてきたから。でも、少しすつでいいなら受け入れていきたい。と思つ、よ」

「…………ありがとう。明奈さん

「名前、呼び捨てでいい。わたしが姉つていつてもたいして変わらないし。侑斗君、さん付けして呼ぶ割にそれ以外は普通に話してる」

受け入れようとしてくれている姉。

俺はどう答えていくべきなのだろう。

「面倒だったから助かる」

「面倒つて何よ」

俺に向けられた笑顔。

どうしてそんなにきれいに笑えるんだろう。

「面倒つていうのは、煩わしいってことだろ」

「意味を聞いてるわけじゃないわ」

この人に笑つていてほしい。

俺はその時本当にそう思つたんだ。

観察日記2（後書き）

たぶんですが、次話で少し時間がとびます。
ここまでは初夏をイメージして書いていましたが、夏本番になると
思います。

夏。
湿度も室温もともに高く、汗でまとわりつい髪の毛が鬱陶しい季節。

とは言つても、その暑さはわたしには関係ない。温度調節をしつかりとした部屋の中でくつろいでいるのだから。

暑いのは体によくない。

「侑斗君、アイス取つて

「自分で取れよ……ああ、はいはい。取るからそんな目で見んな」呆れ顔の侑斗君はソファーから立ち上がりと棒アイスを冷凍庫から取り出して、わたしに投げつけた。

「ねえ、半分個しよ

「は?」

「一個も食べたらお腹冷える……」

「…………」

だつたら食いつなよといつ侑斗君の心の声が聞こえてくるけど気にしない。

「…………」

根負けしなければ侑斗君はいついつわがままを聞いてくれる、はず。

「はあ……。分かったよ。どうやつて半分にするんだ?」

わたしの勝ち。わがままを聞いてもらえる。

「わたしが先に食べて、侑斗君が後から食べる。といつ訳でいただきます」

「は?え、いや。ちよ、待て明奈。それは」

「ふあえつえあい? (それってなに?)」

「何でもねえよ……」

口の中にアイスが入つてたから上手く喋れなかつたけど理解してもらえた。

順調に半分を食べ、溶けて流れた部分を手ですくつてから侑斗君に渡す。

「食べるのは構わないけど、棒アイスじゃなくてカップにしてくれね？」

「えー」

「カップアイス嫌いなのか？」

「全然そんな事ない。別にいいよ。次からカップにする」

「いいならいいって最初から言ってくれよ……」

「善処するわね」

わたしの言葉に侑斗君は溜息をつき、「まつたく」と言いつつ残り半分のアイスを食べ始めた。

少しづつでいいから受け入れようと思つたら、それは案外簡単にできた。侑斗君と遙香さんが優しすぎて、壁を厚くして2人から逃げていた自分が恥ずかしくなつたからかもしれない。

ただ、遙香さんを『母さん』とは呼べそうにない。と語りよりも、

『母さん』と呼ぶ必要性を全く感じないのだ。

わたしはまだ知らない。この時から芽生え始めた愛しくも悲しい感情が、自分の中にあることを。

この昔に覚悟したはずの死に恐れるなんて、そんなのありえない
と黙つてた。

アイスみたいに少しの温度の変化で溶けてしまつぽぢわたしの心
は脆くない筈だつたから。

遺書 1枚目

遺書

? 林 明奈

遺書といつても遺産がどうとかじゃなくて、死人から生きている人への最後のメッセージです。

読まなくても、何の問題もないです。書いておいて何ですが、読まないでほしいと少し思っています。

死んだ人間のことなんか忘れて欲しいと思っているのだけど、忘れて欲しくないという思いがあるのです。『ごめんなさい』。

父さんへ

まず、親不孝な子供でごめんなさい。

たくさんの愛をありがとう。苦しい時、ただ隣にいてくれるだけでわたしは救われました。来世なんて信じていないけど、もし人間として再び生まれることができたなら次もあなたの子供になりたい。そしたら、たくさん親孝行するから。

るやうなら、どうか、幸せに生きてください。

遥香さんへ

最後まで、『母さん』と呼べなくて『めんなさい』。『母さん』と呼ばなくともいいと思つていました。理由は自分でも分からないまです。でも、たぶん呼び方なんて関係なかつたんだと思います。

一緒に過じせて良かつたです。遥香さんもそつと想つてくれましたか。思つてくれていたら嬉しいです。

父さんをよろしくお願ひします。

父さんは優しくて強い人だけど、支えてくれる人が必要です。わたしはもうここにはこられないから。あなたの愛を信じているから。

だから、父さんをよろしくお願ひします。

クッキー

「明奈ちゃん。一緒にクッキー作らない?」

始まりは、遥香さんの一言。

「はあ」

曖昧な返事をしたのが間違いだつたのかもしねり。

でも、この出来事がなければわたしは気がつけなかつただらう。

「柚樹さんの好きな種類を作ろうと思つただけだ、いい?」

「おっけーです」

早速材料を冷蔵庫から取り出し調理を始める遥香さん。

父さんの好きな種類って……どれだ? 基本的になんでも「おいし
い」「この味好きだなあ」と言つて食べるから判断しにくい。……

遥香さんは何を作る気なのだろう。

出でいる材料を見てみる。

もしかして……。

「あの、遥香さん。もしかしてナッツ入りのクッキー作る気ですか
?」

「ええ、そうよ」

え、笑顔で返された……。

とこりうか、父さんナッツ好きなのかな?

「父さんてナッツ好きなんですか?」

「好きつて言つてたわよ? 初めてデートした時にナッツクッキー持
つて行つたらとても喜んでくれたわ。これ好きなんだつて」

「……そう、ですか」

「どうかしたの?」

「いえ、なんでもないです。とびきり美味しいクッキーを作りまし
ょうね」

「ええ。もちろん

父さんといふときに、ナッシュを食べないといけないときはなかつた。だから父さんがナッシュ好きなんて知らなかつた。嫌いなものを隠すために、父さんの好きなものを知らないでいたなんて……。

本当に、馬鹿。

ナッシュを見つめていると、なんだか悲しくなつてきた。

「よし。混ぜ終わつたわ。少し冷蔵庫に入れて休ませましょうか。

……明奈ちゃん？」

「あ、すいません。ボーッとしてました」

「そんなことはいいのよ。びついたの？」

心配そうにわたしの顔を見つめる遙香さん。

なんで？

「泣いてるじゃない」

「え……？」

遙香さんの言葉に驚き、そつと頬に触れる。どうして気が付かなかつたのか分からない。わたしは泣いていた。

「どう、して……？」

どうして涙なんか出るの？

涙の理由

一度流れでた涙は簡単には止まらず、結局遙香さんにあやしても
らうことになってしまった。「大丈夫」と繰り返し言われ、わたし
はそれに甘えた。恥ずかしい、なんて思う間もなかった。
人前でこんなに泣いたのは久しぶりな気がする。

幼稚園のときだって、泣いて先生を困らせるなんてしなかつたの
に。

「……、『じめんなさい。服を濡らしてしまいました……』

「いいのよ。気にしないで。大丈夫だから」

赤く腫れているだらう目に遙香さんは水で濡らしたタオルをのせ
てくれた。

クッキーは私が作つておくから部屋で休んでいて。そう言われた
わたしは素直に部屋に戻った。

タオルを目にのせたままベットに仰向けに寝転がり、お腹の上で
手を組み合わせた。

どうして、泣いていたのか。

自分でもよく分からない。

「泣いてるのに気が付かないとか……意味分かんない」

遙香さんに指摘されるまで、自分が泣いていることに全く気が付
かなかつた。

ねえ、どうして？

「……だれか、おしえて」

父さんの好きなもの知らないってことが悲しかつたから？

遙香さんが父さんの好きなものを知つていたから？

コンコン。

思考を遮るようにして、ノックが聞こえた。「どうぞ」と答えれ
ば、ゆっくりと扉が開き誰がか足を踏み入れる音が聞こえた。

「明奈……？」

侑斗君の声。

「何？」

起き上がる「う」とすると、二つの間にか近づいていたらしい侑斗君に頭を抑えられてしまった。起き上がりれない……。

「そのままで、いいから」

「ごめん……ありがとう侑斗君

赤く腫れた目を見られるよりは気が楽だ。侑斗君の行動に助けられた。

「何があつたんだ？」

「…………」

「話したくないなら、別にいい」

「話したくないわけじや、ないわ……わたしにも何があつたか、よく分からぬの」

クッキーを作ることになつたこと。

ナツツが嫌いなこと。

父さんがナツツを好きだつたこと。

自分がどうして泣いていたか分からぬこと。

鼻声でゆつくりと話した。侑斗君は相槌を打ちながら最後まで話を聞いてくれた。

「人の気持ちなんて、他人には分からぬ。けど、たぶん明奈は寂しかつたんじやないか」

「寂しい？」

「今までずつと柚樹さんと2人だつただろ。前触れもなく家族が増えて、しかも自分のほうが長く一緒にいたのに知らないことがあつた。悲しいとか、寂しいとか感じることがあつても仕方ないだろ」

「侑斗君も、そうだつた？遙香さんと2人だつたのに、父さんとわたくしがそこに入り込んで、知らないこととかがあるつて分かつて、悲しかつた？」

「どうだらうな。俺は、母さんが笑つてればそれで良かつたからな。

再婚で聞いて驚いたけど、柚樹さん良い人だから安心した。俺の父さん最低な奴だつたから

互いに似た境遇であつたからか、話を聞いたり話したりする中で理解し合える部分が多くつた。

「話、聞いてくれてありがとう。助かりました」

タオルを目の上から外し、ゆっくりと起き上がりつてわたしは侑斗君にお礼を言った。

「どういたしまして。もう大丈夫だな」

「うん」

侑斗君が出ていった扉をじっと見つめている中で、わたしは胸が熱くなるのを感じた。

もつと一緒にいたい。
もつと話したい。
もつと……。

こんな感情わたしは知らない。

「の感情の咲前は、なに？」

日傘（前書き）

本編から少し離れます。

主人公と父親の日常を書いてみました。

この話は読まなくともストーリーの進行上問題ないです。

「明奈、明日一緒に買い物行こう?」

「うん」

夏休み2週間前の日曜。天気もよく絶好の買い物日和だ。父さんと2人っきりで出かけられるの、嬉しい。「何がいいとか僕にはよく分からぬけど、一緒に見て回つていいかい?」

「ぜひお願いします。ふふつ。ね、行こう、父さん」自分のテンションが上がるのを抑えられない。久しぶりの父さんとの買い物。楽しまなくては。

「水色とピンクは持つているから他の色がいいな」

白色の日傘をクルクルと回しつつ、父さんに話しかける。

「んー……明奈は白い服をよく着てているから、黒とか紺でもいいんじゃないかな」

「そう?じゃあ……これとか?」

白色の日傘をたたみ、黒色の日傘を手に取る。「開いてみたら?」

「ん。……どう?」

開いてみると、黒一色とシンプルなのだが模様が細かく刺繡されておりとてもきれいだった。

「うん。今日の服装にもあつているし、いいと思つよ。いつもとは少し違つて新鮮な感じ」

「じゃあ、これにしようかな。刺繡もきれいだし」

幸せな時間を家族と

口傘（後書き）

次から話をどんどん進めたいと思います。

時間がかかるかもしれません、頑張ります。

「もう少しで夏休みですが、氣を引き締めて授業に集中してくださいね」

あーちゃんの一言にクラス全体が「えー」という声を上げた。冷房の効いた室内とはいえ、体はダルイ。もう少しで夏休みといふこともあって、みんなダラダラとしている。

「？林、英語のノート[写させで～」

「夏休み前から宿題写そつなんていい度胸してるじゃない、悠斗」

「だつて～……イギリスじゃこんなに面倒な英語話さねえよ」

悠斗は小学校6年生までは、母親の実家があるイギリスに居たため英語は話せる。だけど、日本で地方ごとに方言があるようにその地域独特の英語だから苦労しているのだ。

「日本に来て、4年近く経つてゐるのにまだそんなこと言つているの？」

「だつて～……」

下を向いてしまう悠斗。

「分かったわよ。ノートは貸すわ。ちゃんと中身も確認しなさいよ」頭を英語のノートでポンと叩くと、キラキラとした笑顔で「ひらりを見た。

「うおおおお！ありがと高林！～」

「どういたしまして」

「？林さん」

放課後、一緒に帰るため悠斗君を待つてゐると、あーちゃんがわたくしの名前を呼んだ。

「あーちゃん？」

「良かった、まだ帰つてなかつたんですね。少しお話があるのです

がいいですか？」

お話、か。たぶん病気のことだよなあ……。

「はい。大丈夫です」

……別に一人で帰つてもいいよね。侑斗君と帰るのは今日は諦めよう。

「单刀直入に聞きますね。前回聞いたときから1ヶ月経ちましたが、病気の進行はどうですか？」

担任として、問題はどうにかしないといけないんだろうな。
たかばやしあきな

「…………そろそろ、学校に来るのが難しくなるかもしれません。体調は、むしろ良い方なんですが、体温は下がるばかりです」

「病院の先生は何と仰っているのですか？」

「夏休み明けは学校に行けないだろ、と」

自分のことなのに、どうしてこんなにも冷静に喋られるのだろう。いつもそうだ。学校にはずっと行きたい。勉強することは嫌いじゃないから。なのに、学校に居られる期間が短くなつたことを報告するとき、こんなにも淡々と話す。

「そう、ですか……」

眉が寄つて、怒つているみたいな顔をするあーちゃん。何故？

「体育祭と文化祭は、体調が良ければ許可を先生に預いて来たいんですけど、いいですか？」

父さんに聞いておくように言われていたことを聞く。別に、わたしが体育祭や文化祭に参加したいと言い出したわけではない。……参加したくないわけじゃ、ないのだけど。

「はい。もちろんです」

眉からシワがなくなつて、笑顔になる。こうじりと変わる表情にどんな意味があるのだろう。

「講堂に行くので整列して下さー」

「……めんどくせえ」

講堂で行われるのは、前の学校では理事長の話が長く、面倒でしかなかつた終業式。

「夏休みだからといって氣を緩めて生活しないようにしてください。また、事故等に巻き込まれないよう、十分に氣をつけましょう。えー、はい。校長の話を終わります」

黒髪に白髪の混じり始めた校長が早々に壇上を降りよつとする。随分と適當な人だ。

「校長先生！もう少しお話いただかないと……」

「まあまあ。生活指導の先生やらがお話するでしょう。同じようなことを何度も言われたら、生徒も飽きてしますよ」

若い教頭が校長を止めるが、生徒から支持される理由が伺える発言をして壇上を降りきつてしまつ。

校長の話の流れからか、他の教師の話も短く終業式は呆氣無く終わつた。

「超楽じゃねえか」

そう呟くと、出席番号が後ろの田中（弟）に「何が？」と聞かれた。小さい声で言つたはずなんだが、聞こえていたのか。

「終業式つてもつと話が長いもんだと思つてたからさ」

「この学校は教師の話が短いんだ。校長が面倒くさがりだからな。周りもなんとなく短くしないといけない雰囲気になつてゐる」

田中は無表情に喋る。

「前の学校は校長、つていうか理事長の話が長かつたから余計短く

感じた」

「私立西東学園、だつけ？」

あの金持ちはばかりの、と付け加える田中。別に金持ちじゃない奴もいるぞ。俺とか。

「ああ。西東は堅つ苦しかつたから桜ヶ丘に来て良かつたよ」

「へえ。なんかそれ、嫌味に聞こえるな。西東に行けなかつた奴からしたら瘤に障るだろうよ」

無表情だから、感情が読めない。何を思つて言葉を発しているのか。

「悪い」

「別に謝つてほしいわけじゃないんだけど。まあいいや」

「いいのか？」

「うん。嫌味には聞こえたけど、榊はわざわざ嫌味を言つ奴に見えないから。無意識にでた言葉はある意味、嘘がなくていい」

「田中つてよく分からぬ奴だな」

「良い奴の間違えだろ」

「……そうだな」

「あ、兄だ」

教室の手前で田中（弟）が田中（兄）を発見し指さした。

「侑斗君、朝ぶりね」

「そうだな」

背の高い田中（兄）に隠れて見えなかつたよつて、明奈も彼の隣にいた。身体を少し傾けてこちらに手を振る。

「朝ぶりだな弟」

「そうだな兄」

相変わらずの無表情で2人は挨拶を交わした。終業式だけあって、校則通りの格好をしているためどっちがどっちかよく分からぬ。とりあえず、俺の隣にいるのが弟で明奈の隣にいるのが兄か。

「ふふつ。名前で呼び合えばいいのに、兄、弟つて

明奈は手を口に当てる、『らるる』ようにして笑った。

「？林、笑うな」「笑うな、？林」

「微妙なシンクロね。どうせなら統一してよ」

「微妙とか言うな」

無表情で同じように突つ込む姿に、俺も吹き出してしまつ。姉弟で大爆笑し、双子の兄弟に呆れられてしまった。

明奈の命の時間制限タイムリミットにも気が付かず笑っていたこのときが一番幸せだったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6254y/>

LOVED

2012年1月10日16時50分発行